

# 平成21年度 江別市 特別支援教育便り 第3号

## 「教員・保護者向け」

発行 平成21年6月

江別市教育委員会

編集 学校教育支援室

特別支援教育コーディネーター

深瀬 禎一

TEL 381-1409

新緑の季節となりました。特別支援教育便り第3号をお届けします。  
教育委員会の組織は今年4月に改編があり、新たに学校教育支援室が設けられています。  
今号では、就学相談や特別支援教育に関する担当窓口のご案内と、実際にどのような相談のケースがあるのか、さらに就学指導委員会の役割などについておしらせします。

## 1. 就学相談や特別支援教育の担当窓口

昨年度まで学校教育課参事（教育支援担当）と教育部参事（学校安全・少年指導）で受け持っていた業務が統合されて、学校教育支援室ができました。

就学相談や特別支援教育に関する担当窓口は、学校教育支援室で行っています。

### ●保護者のみなさんへ

お子さんの発育や発達について、困っていたり悩んでいることがあれば、いつでも就学相談や教育相談をご利用ください。検査等の依頼なども受け付けています。

※相談などは、直接教育委員会においでいただくほか、電話でもかまいません。

※秘密は守ります。また、学校への連絡を希望するのであれば、担当から学校と相談することもできます。

※各学校にも特別支援教育のコーディネーターの先生がいて、支援室のコーディネーターと連携をしています。場合によっては、専門知識をもった養護学校の先生等に相談するシステム（「巡回相談」といいます）の橋渡しもしています。

＜担当＞	特別支援教育コーディネーター	深瀬（ふかせ）
	学校教育支援室	主査 廣田（ひろた）

## 2. どのようなときに相談すればよいか

～そのケースと内容について～

教育委員会で、これまでさまざまな教育相談や就学相談をお受けしてきた中で、最も多かった例は、保護者が家庭や学校でのお子さんの様子を見ていて、他の子どもと違うとか、不思議な動きをするとか、人に迷惑をかけてしまうような行動が見られるなどの異変に気付いて、“お困り感”をもっているケースでした。

⇒たとえば、ご家庭ですと

- 『うちの子どもは、どうも他の子どもと仲良く遊ぶことができない。』
- 『他の子どもとうまく交流することができない。』
- 『他の子どもと些細なことでトラブルになってしまう。』・・・といった声です。

こうしたご家庭での様子から困難さが見受けられる場合のほか、参観日などで実際にお子さんの様子をご覧になり、『うちの子は、学級で落ち着いて学習できていない。』とショックを受ける場合もあります。

⇒ところが・・・

当の子ども自身も、そのことに“困り感”を持っていることが少なくありません。

●『僕はどうして、じっと椅子にすわってられないんだろう。』・・・

子どもは、本当にそのように行動したくて行動しているのかどうかわかりません。それが発達障がいの特徴でもあるのです。

さらに、学級担任が様子を見て異変に気づき、学校を通じて相談してくるケースもあります。まとめると、相談のきっかけになるのは、次の三つです。

### ①親の困り感 ②子どもの困り感 ③教師の気づき

まずは、お子さんの様子を普段からよく観察してください。すこし注意深く見ていただくと、何かの異変が見つかることがあります。それが“気づき”であり、そこで気付いたことを基に、一度、相談してください。それで今後の指導の方針が立てやすくなることがあります。

必要に応じて検査を実施し、お子さんの抱えている問題をきちんと捉え、早めに適切な支援を行うことにより、困難な状況から抜け出して成長していくことができます。

★一番に考えなければならないのは、子どもの健やかな成長を促すことです。もてる力をしっかりと伸ばしてあげることです。そのためには、どのような教育環境のもとで就学するのがよいのか、適切に判断することが重要です。

## 3. 就学指導委員会の役割

江別市には、条例で定めた就学指導委員会という組織があります。医療、保健、福祉、教育関係者による18名の委員で構成され、学齢期にある子どもがどこで学習するのが最も適切なのか、生育歴や各種検査の結果を参考にして検討し、答申を行っています。

具体的には、就学相談があったお子さんに対して、教育委員会が調査・審議を就学指導委員会へ依頼し、それを受けて発達検査等を行い、望ましい就学先を答申するのがこの委員会の役割です。

⇒ところで・・・

この就学指導ですが、新入学のときに一度きりだと思っはいませんか？

実は、入学後に普通学級から特別支援学級に転籍したり、逆に、特別支援学級から普通学級へ転籍する例もあります。子どもの発達度合いは一時点だけでは推し量れません。

ですから、固定的に考えるのではなく、そのときの状況に合わせて、途中から就学先を変更することもできます。その子にとって、何をどこで学習することが将来の生き方に必要なのか、よく考えて決定することが大切だと思います。